

研究課題名（課題番号）：強度行動障害を有する知的・発達障害に関わる医療従事者向け研修プログラム開発に向けた研究（24GC0701）

分担研究報告書

分担研究課題名：「日中活動とコミュニケーション」講義資料及び講義ビデオの作成

研究分担者：笹森洋樹・野村和代（常葉大学 教育学部 学校教育課程）

研究要旨

「日中活動とコミュニケーション」（応用編）について講義資料及び講義動画を作成した。強度行動障害のある人にとって日中活動やコミュニケーションにどのような困難があるか、教育領域ではどのように対応し、適切な行動を増やす試みをしているかについて中心的なテーマとし、特別支援学校の教育課程や実践の具体例を挙げて解説するように講義資料を作成した。あわせて、個別の支援計画から日中活動の組み立てやコミュニケーション支援に生かせる情報の読み取り方や、知的発達レベル・特性に合わせた伝え方や感覚過敏への対応、強度行動障害の見立てについて解説を行った。

A. 研究目的

強度行動障害者の入院受け入れにあたり、入院期間が比較的長くなる場合には、日中の過ごし方やコミュニケーションの取り方が入院中の大きな課題となる。これらは、安全に病棟で過ごすということだけでなく、退院後の適応・強度行動障害の改善に大きくかかわるところである。一日の過ごし方を見通しがつきやすいように工夫し、問題行動以外の日中活動や余暇活動が行え、問題行動以外の方法でコミュニケーションできることを目指し、支援方法を学習すること、教育・福祉場面で有効であった手法について、排泄・入浴・更衣・食事などの身辺動作についての工夫など積極的に取り入れることができることをねらいとし、学習の機会を提供するため、研修プログラムを作成する。

B. 研究方法

本研修プログラムは、強度行動障害のある人にとって日中活動やコミュニケーションにどのような困難があるか、教育領域ではどのように対応し、適切な行動を増やす試みをしているかについて、特別支援学校の教育課程や具体的な教え方の例を挙げて講義資料を作成した。

（倫理面への配慮）

事例に関しては、個人情報保護に最大限留意し、発表に関しては本人に同意取得が困難であるため、保護者に説明し同意を得ている。

C. 研究結果

本研修プログラムは、日中活動の組み立てのために、「構造化（スケジュール、物理的構造化、視覚的構造化、ワークシステム）」、コミュニケーション支援のため「視覚支援等を用いた機能的コミュニケーションの形成」を具体的に取り上げ、教え方の例を示した。

構造化や視覚支援を用いたコミュニケーション支援については、教育領域でもよく実践される支援方法であるが、強度行動障害のある人への支援方法としての有効性が認められている。過去の先行研究においては、飯田ら（2004）は2004年から3年間実施された「強度行動障害を中核とする支援困難な人たちへの支援に関する研究」の全国の強度行動障害の支援機関による支援の比較研究において、特に重要な支援として見出されたもの上位に、「構造化を図ることで本人に了解しやすい環境整備」「話

し言葉に依存しない視覚的コミュニケーション方法の活用」の2項目があげられた。また、最近の報告では、金城ら(2023)は2000年から2020年までの強度行動障害を対象とした実践事例21論文27事例について実践の効果を分析し、「スケジュール」「コミュニケーション支援(絵・写真カード等)」は実践事例が多く、問題行動の減少につながっていたとまとめている。

課題分析は応用行動分析学における手法の一つであり、課題遂行に必要な行動連鎖を分析することであるが、適切な行動を教える際に有用であり、さらには強度行動障害のある人は、行動連鎖の躓きが攻撃行動や自傷を誘発する要因となる場合がある。こうした事例においては、課題分析により、事前に対策を講じることが容易になるとして、本研修プログラムに採用した。

さらに、個別の支援計画から日中活動の組み立てやコミュニケーション支援に生かすことのできる情報の読み取り方や、知的発達レベル・特性に合わせた伝え方や感覚過敏への対応についても事例等を示し、理解の充実を図った。

D. 考察・結論

強度行動障害は、幼児期・学齢期からその傾向が認められることが少なくなく、特別支援学校等において、どのような支援を受けてきたかを医療者が知ることが一定の価値があると考えられる。また、学校に在籍しながら入院する児童・思春期の事例においては、お互いの支援方法について理解し、一貫した支援を構築していく必要がある。学校と医療の連携は課題が多く残されており、強度行動障害を共通の視点でとらえ、支援方法を共有できるよう研修を充実させていくことが求められるといえよう。

E. 健康危険情報

本研究に関する健康危険情報は無い。

F. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表
なし

- G. 知的財産権の出願・登録状況
なし

<参考文献>

1. 飯田雅子(2004)強度行動障害を中核とする支援困難な人たちへの支援について. さぼーと, 55(1)pp45-51.
2. 金城紅杏・照屋晴奈,・金珉智(2023)多様な障害像をもつ強度行動障害に関する教育的・社会的ニーズの文献的考察. Total Rehabilitation Research,11 pp1-24.
3. レイモンド・G・ミルテンバーガー著、園山繁樹・野呂文行・渡部匡隆・大石幸二訳(2011)行動変容法入門 二瓶社.

日中活動と コミュニケーション支援

常葉大学教育学部 野村和代・笹森洋樹

- 本講義に関して開示すべきCOIはありません
- 事例に関しては、個人情報保護に最大限留意し、発表に関してはご本人またはご本人に同意取得が困難な場合、保護者もしくは成年後見人に説明し同意を得ています

本講義の目標

- 入院期間が比較的長くなる場合でも、一日の過ごし方を見通しがつきやすいように工夫し、問題行動以外の日中活動や余暇活動が行え、問題行動以外の方法でコミュニケーションできることを目指し、支援方法を学習する。
- 教育・福祉場面で有効であった手法を積極的に取り入れることができる（排泄・入浴・更衣・食事などの身辺動作についての工夫も含める）。

強度行動障害のある人への 日中活動の組み立て

- ・強度行動障害のある方は、一見ささいなことをきっかけに激しい行動を呈することが少なくない。
 - ・状況の理解が難しいとき
 - ・状況の変化そのものが刺激になっている。
 - ・やることがないとき
 - ・どのように過ごしていいのかわからないとき。
 - ・活動の切り替えのタイミング
→スケジュールの活用によりリスクの低減が期待できる。
- ・教育領域では、身の回りの環境をわかりやすくすること、適切な行動を増やすことに重点を置いて、日中の活動を組み立て、将来の自立につなげていく。

特別支援学校の教育的対応

- 特別支援学校（知的障害）では、各教科及び自立活動の指導に当たっては、子供一人一人の実態等に即した個別の指導計画を作成し指導しています。
- 知的障害のある子供には、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しい傾向がみられます。
- そこで、特別支援学校（知的障害）では、実際の生活場面に即しながら、繰り返して学習することにより、例えば、自分の意思を伝えることや身近な日常生活における行動など、日常生活や社会生活を送る上で必要な知識や技能等を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導を行っています。

参考：文部科学省「障害のある子供の教育支援の手引」（2021）

自立活動の指導

自立活動の指導は、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした、特別支援学校学習指導要領に示されている指導領域、学校の教育活動全体を通じて行う。

児童生徒の障害の状態や発達の段階等によっては、必要に応じて特設の自立活動の時間を設ける（自立活動の時間における指導）。

特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（2018）

特別支援学校の学校教育全体＝自立活動 といえるが、児童生徒の実態のなかで、事柄を絞って、集中的に教える授業としての『自立活動』がある。

自立活動の目標

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的な発達の基礎を培う。

(特別支援学校小学部・中学部学習指導要領)

子ども一人一人が障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすることを支える、という視点が重要

個別の支援計画と個別の指導計画

- 学校では、年度の始めに、担任が個別の指導計画を立案する。子どもの実態と年間の授業計画を照らし合わせて、子どもに着けたい力を指導計画の書面に落とし込み、保護者と共有する。
- 子どもの得意なこと・苦手なこと、保護者の願いや困り感、教師側の想いや子どもへの期待が、個別の支援計画や指導計画に反映される。
- 個別の指導計画から、子どものできていること、認知的な理解の程度、学習上・生活上の課題などを読みとることができる。

実際の個別の指導計画

小学部 第4学年3組 氏名

<p>年間目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一日の予定表や絵カード、言葉掛けを手掛かりに次にやることと分かる、一定時間学習に参加することができる。(心理的な安定) ・やりたいことや、嫌なことなどを、教師の言葉の代弁をとって自分の気持ちを言葉で伝えたり、二者択一から選んだりすることができる。(コミュニケーション)
--

	目標	指導内容と手だて	評価
日常生活の指導	<p><上着の着用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・屋外に出るときに、ジャージの上着を着用して過ごすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昼休みにグラウンドへ行く前にあらかじめ机の上にジャージの上着を用意しておく。 ・「帽子」「上靴」「ジャージ」と、着用するものを教師が伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昼休みに教室から外へ向かう前に、「帽子」「上靴」「ジャージ」と着用するものを繰り返し伝えたことで、必要なものが分かり、指示を受け入れてジャージの上着を着ることができるようになった。
	<p><一日の予定></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールカードを見て、今からやることや次にやることと分かる、決められた活動に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別のスケジュールカードを用意する。 ・活動場所や活動内容を事前に伝える。 ・タイマーを用意したり、作業量をあらかじめ示したりして、活動時間、活動量を分かりやすくする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一日の日課が書かれたスケジュールカードを見ることで次に行くことへの見通しをもつことができ、活動にもスムーズに取り掛かることができるようになった。また、一つの学習の中で、活動が複数あるときには、「①～、②～」というような活動内容が書かれた手順表を提示することで、やることと分かる落ちていて活動に取り組むことができた。
	<p><掃除></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほうきで掃く→雑巾で水拭きをする掃除の流れが分かり、自分で続けて行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水で濡らした新聞紙を床にまいておく。 ・ゴミを集める場所に色テープなどで枠を作っておく。 ・水拭きの場所を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ、水で濡らした新聞紙を床にまいておくことで、やることと分かる自分でほうきとちりとりを持ってきて残らず集め取ることができた。その後の床の水拭きも自分から取り掛かることができた。
	<p><会活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会、帰りの会に自分の楽しみなこと、楽しかったことを二者択一で選ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業絵カードを教師があらかじめ二つ選んでおき、「どっちが楽しみ(楽しかった)?」と聞きながら、提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の好きな活動「ことば・かず」「給食」「昼休み」「図工」などの予定絵カードの中から2から3枚を提示すると、絵カードをよく見ながら、楽しみな活動を指さして選ぶことができるようになった。

日常生活の指導では、身辺自立や見通しをもって活動することなどが取り上げられることが多い。日中の過ごし方、支援の組み立て方の参考になるかもしれません。

生活単元学習	<p><秋パーティーをひらこう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回同じ活動に取り組むことで、やることと分かる、一定の時間内、自分から製作活動に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の始めに、今日やる内容と製作する数を提示して伝えるようにする。 ・手順や作り方など、同じ流れで繰り返してできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パーティーで行うゲームの準備物の製作に取り組んだ。写真付きの手順表を見ながら、容器に紙粘土を詰めたり、両面テープで画用紙を貼り合せたりという5から7の工程を一人で進めることができた。毎回行うことで手順を覚え、手順表がなくてもぶどうとどんぐりを製作することができるようになった。
	<p><スターをゲット！スーパーマリオ(静北祭)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の活動の一連の流れが分かり、グループの活動場面で友達と一緒に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やることと分かる環境設定にし、動線を短くする。 ・始めは、教師が先導しながら、一緒にやり方を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回同じ流れで取り組むことで、平均台を渡る、コインを取る、コインを籠に入れる、スイッチを押して音を出すという一連の流れを覚え、自分から取り組むことができるようになった。体育館のステージに場所が変わっても、同じようにグループの友達と一緒に取り組むことができた。

生活単元学習では、他の児童生徒と一緒に生活に密着したテーマに基づき学習が進む。自由時間ではなく、テーマ性をもった活動のときに集団のなかでどのように過ごしているのかという学校での様子がわかる。

	目標	指導内容と手だて	評価
国語 算数	<パズル> ・9片のパズルを完成させることができる。	・興味のある、食べ物や乗り物などのパズルを用意する。 ・始めは、3片程度組み合わせておく。手が止まった時には、正確な位置を指さすようにする。	・新幹線の9片パズルに取り組んだ。始めは教師が3片を組み合わせておいたものを提示することで、残りの6片をピースの色や形をよく見ながら正しく合わせていくことができた。9片全てを自分で組み合わせることができるようになった。
	<運筆> ・簡単な平仮名のなぞり書きをすることができる。	・持ちやすい太めのマーカーペンを用いる。 ・身近な名詞のイラストを提示しておく。	・その日の給食メニューの中から一つ取り上げ、補助線に沿って書くことに取り組んだ。「さかな」「ごはん」「にく」など2から4文字の単語を、補助線に沿ってなぞり書きすることができた。

各教科の指導では、言葉や数的な概念などの理解の様子が読み取ることができる。余暇支援のヒントにつながることも多い。

	目標と評価	目標と評価
音楽	<ドレミの歌> ・鍵盤ハーモニカで、ドレミの歌の一部分の音を出すことを目標に取り組んだ。提示されたイラストと鍵盤に貼ったイラストをよく見ながら、「ド」と「ファ」の音を出すことができるようになった。何度か繰り返すことで、教師が提示するイラストを見なくても、体でリズムを取りながら曲に合わせて音を出すことができるようになった。	体育 <ボール運動(サッカー)> ・ボールを足でドリブルしたり、ゴールにシュートしたりすることを目標に取り組んだ。新聞紙で作ったボールを、足で少しずつ前に蹴り出しながら進むことができた。また、止まったボールを4m先のゴールに向かってシュートすることもできるようになった。
図画工作	<食べ物を作ろう> ・紙粘土を両手で丸めたり伸ばしたり道具を使ったりして形を変えていくことを目標に取り組んだ。紙粘土を棒状にしたり、ナイフを使って切ったり模様をつけたりと、自分なりに考えながらバナナやみかんなどを「ー」ができた。作った物をプラスチックカップの中に入れ、宿泊学習で食べたフルーチェに見立てた作品を作ることができた。	特別活動 <いもほり> ・畑の中からさつまいもを見付け、みんなと一緒に収穫することを目標に取り組んだ。土の中からさつまいもを見付けると自分で掘り出し、教師が持つビニール袋の中に入れることができた。自分から繰り返し取り組み続け、袋いっぱいさつまいもを収穫することができた。

年間目標の評価	<p>学校の日課や一日の生活への見通しをもてる部分が前期より多くなり、個別のスケジュール表を見なくても、次に何をやるかが分かり、スムーズに活動に取り掛かることができるようになりました。また、言葉での指示を理解できる部分が増え、活動内容を詳しく伝えることで、友達と一緒に最後まで活動に取り組み続けることができるようになってきました。</p> <p>その都度、その場面に応じて教師が気持ちを代弁して正しい言葉で伝えることを繰り返したことで、「木(枝)を探しに行く」「テープとって」など、自分から伝えることができる言葉も増えました。また、会活動の中での発表場面では、「ことばかず」「きゅうしよく」「ずこう」などの4枚の予定絵カードの中から、自分の楽しい活動や頑張った活動を指さして選ぶことができました。学校生活一日を通して、落ち着いて過ごすことができるようになってきました。</p>
---------	--

年間目標の評価では、重点的に取り組んだこととその成果がまとめてあるため、現状が把握しやすい。これまでとの比較で、成長したことも書かれていることが多いため、学校での様子や、適応の課題なども読み取りやすい。

他にも...

中学部・高等部では、『作業学習』という、就労に向けて様々な力を身に付けていくことを目的とした授業がある。

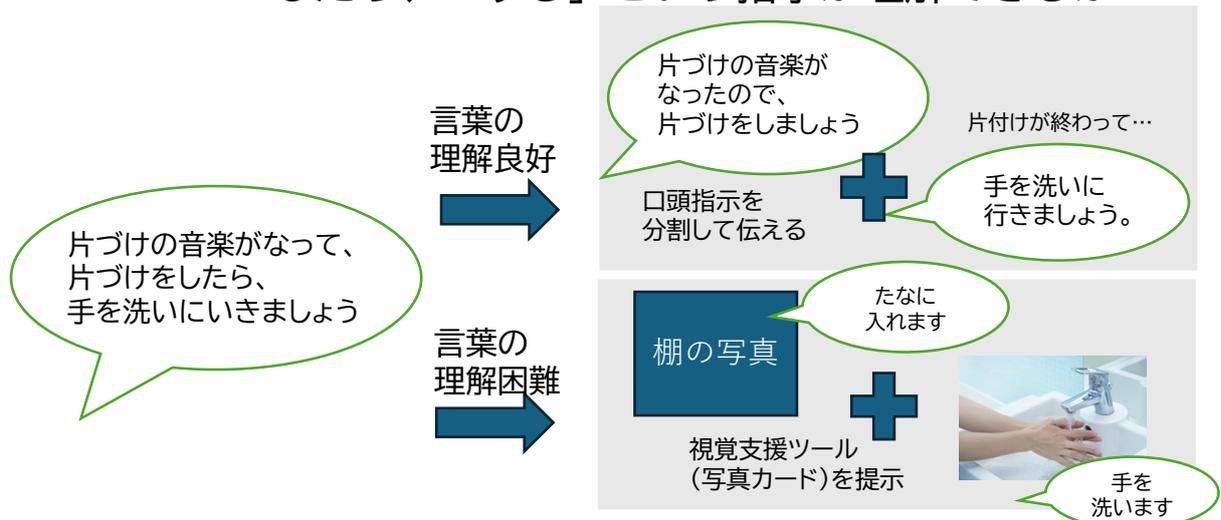
『作業学習』では、作業のためのスキルだけでなく、仕事をするうえで必要な様々な場面でのコミュニケーションを学んでいく。

どんな作業であれば、どんな環境調整があれば一人でできるのか、どのようなコミュニケーションスキルの練習にとりくんでいるのか、などの情報は、日中の活動の組み立てに役立つかもしれません。

わかりやすさ 知的発達レベル・特性にあわせた伝え方

【ポイント】

- ・言葉・意味そのものを理解しているかどうか
- ・指示の長さ・量は適切か
- ・「～したら、～する」という指示が理解できるか



知的発達レベル・特性にあわない 伝え方のリスク

- ・強度行動障害のある方は、成育歴のなかで、本人にとってわかりやすい環境、かかわりの中で過ごすことができず、変化や人からのかかわりに良い経験をしていることが少ない傾向がある。
- ・指示されること、特に複数回にわたって、口頭で指示されること、問題行動の引き金になることもある。
- ・聴覚過敏のある人の場合には、人の声そのものが刺激になることもある。
- ・内容を理解できているか、過敏性や過去の経験による情緒的な反応（人からの声かけと攻撃行動が結びついている）を引き起こさない伝え方・距離の取り方で伝えることが重要。

見通しと構造化

- 自閉スペクトラム症の人は「見通しを立てることが苦手」と言われる。見通しとは、「これからどんなことが起きるのか」「自分は何をしたらいいのか」「いつ終わるのか」というような要素がある。
- 日常生活の複雑な要素を整理し、分かりやすくすること（構造化）で、見通しが立ちやすくなり、落ち着いて過ごすことができる。

構造化

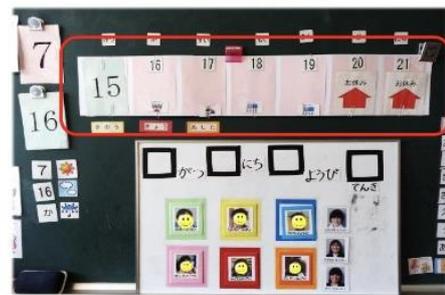
- スケジュール : 時間の見通しが持てる。次に何があるかわかる
- 物理的構造化 : 場所を手がかりに環境の意味を知る
- 視覚的構造化 : 見て何をすることがわかる
- ワークシステム : 活動の流れと終了後を知る、自立して取り組める

スケジュール

1日のスケジュール（個別に準備）



1週間の予定



1ヶ月の予定



スケジュールは、個人のためのものを個別に用意し、本人が確認しやすい場所に置く。必要に応じて、1週間や1か月の予定を示しておくのもよい（検査や診察、面会や外泊の予定などを示す）

物理的構造化



どこで活動に取り組むか、どこから道具を持ってくるか、どこで休むか、目的や活動ごとに場所が分かれている。

一つの場所で、活動、道具の準備、休むということをせずに、場所ごとに分けることで、「この場所にいるから～をするときだ」と理解しやすくなる。気が散る要素や刺激を最小限にできる。

より集中できるようにするには、パーテーションなどで空間を仕切ると良い。

国立特別支援教育総合研究所 真部信吾スライドを改変

視覚的構造化

- 絵カード・写真カード
- 適切な行動を引き出す視覚支援



ハンドソープは「1」回だけ押すが見てわかる

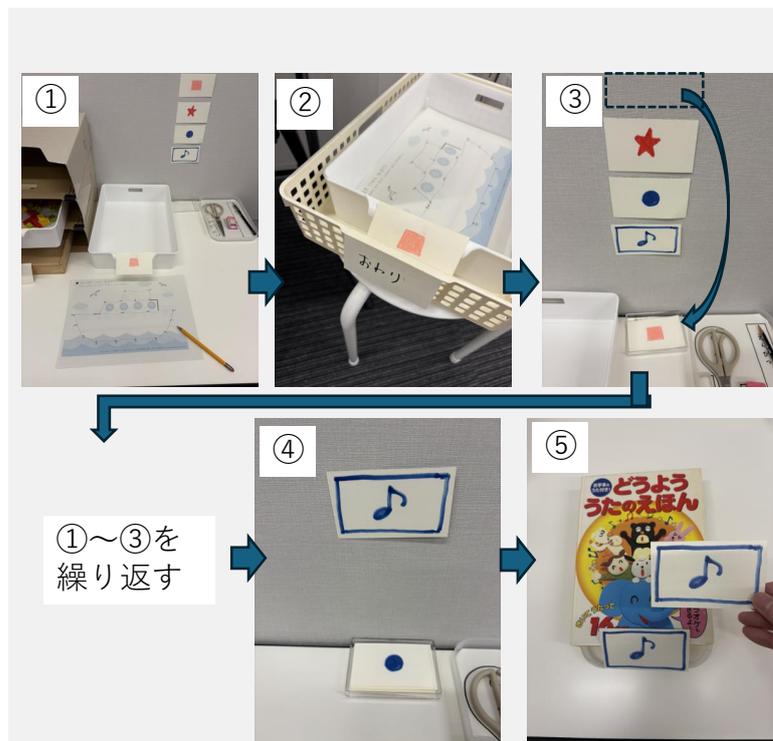


靴をどこに置くかが見てわかる(足型でも良い)



必要な物がそろっているか一目で分かる。片付けも自分から取り組める。

ワークシステム



ワークシステムのタスク選び

- 落ち着いて時間を過ごすための活動
 - ➡作業的な課題、自立課題から本人にあうものを選ぶ
- 本人がすでに獲得している余暇スキルを使う
 - 例：パズル、ブロック、図鑑をみる
 - ※行動問題が出にくいもの、一人で取り組めるもの
 - ※人と一緒にするものは、タスク終了後の活動として実施するのもよい

コミュニケーション支援

- 自閉スペクトラム症の人は、対人コミュニケーションの困難を抱えやすい。
- 強度行動障害が顕著になっていく過程で、人＝脅威、攻撃する対象と学習している場合があり、穏やかなやりとりのなかで、他者とのコミュニケーションを再学習していく必要がある。

コミュニケーションの形態と機能

コミュニケーションの形態

- 動作(物を渡す、手を引く)
- ジェスチャー、うなずき、指さし
- 発声(「ア、ア」と言うなど)
- 写真や絵
- サイン
- 文字
- 音声言語(単語、文章)

AAC (Augmentative & Alternative Communication)

補助代替コミュニケーション

...絵カードや録音した音声ボタンを押すと再生される機器などを使う

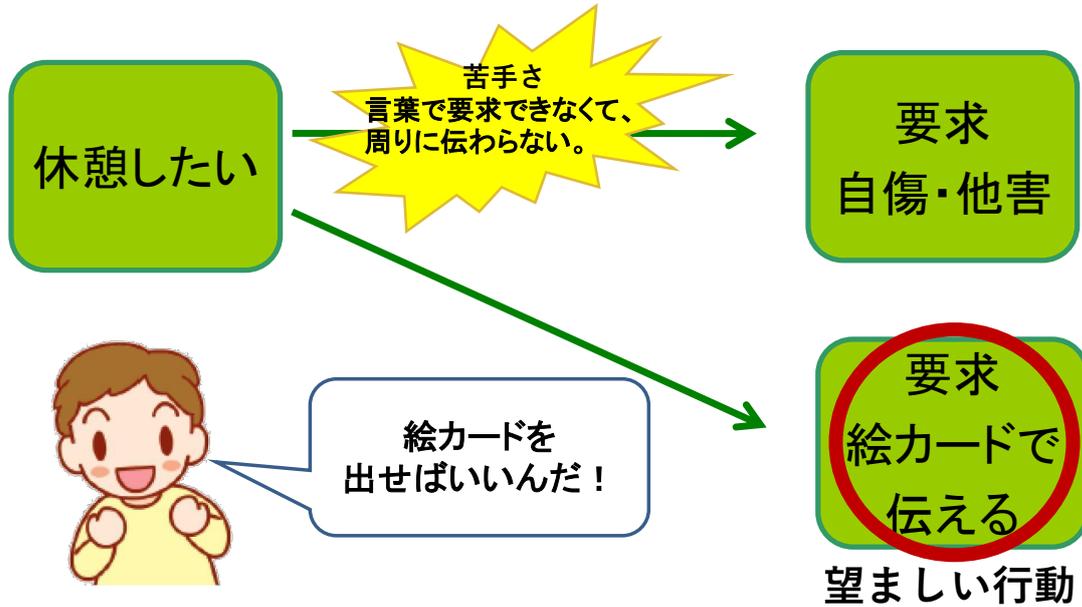
国立特別支援教育総合研究所 真部信吾スライドを改変

コミュニケーションの機能

- 注目、援助の要求
- 好きな物、活動の要求
- 休憩の要求
- 物や場所を示す
- 説明
- 身体の痛みの訴え
- 混乱や不快感の訴え
- 状況や活動への拒否
- 情報請求
- 日常的あいさつ

どのようなコミュニケーションができるか、そのコミュニケーション機能を果たしているかを把握する。

機能的コミュニケーションの形成



本人にとって、より難易度が低い、同じ機能のコミュニケーションを獲得できるように

選択肢を提示される⇒選ぶ

～適切なコミュニケーションの学習の基礎～



- 食べ物、飲み物、好きな活動、行きたい場所などを、選択肢の中から選ぶことができる。
- 『選択肢を提示される⇒選ぶ』ことに慣れてくると、手元に絵カードを置いておき、『自分の飲みたいときにスタッフに要求する』という要求のコミュニケーションにも発展させやすい。

活動を選択する

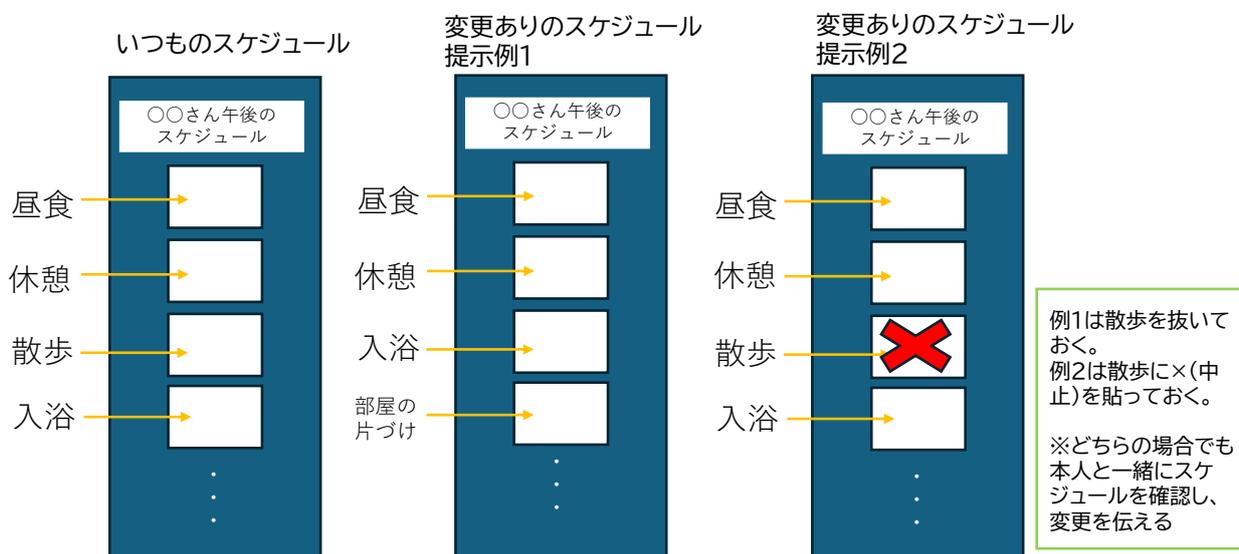
- 火曜日と木曜日は、昼食後にスタッフと1対1で中庭に散歩に行く日課があり、本人は楽しみにしている。中庭をぐるぐる歩くと、ベンチでゆっくりすごすときがある。



自己選択、自己決定できるということは、本人のQOLにとっても重要。本人の希望を周囲の人が知ることは、付き添って支援する際の周囲の人が自分の段取りや見通しを立てることに役立つ。

スケジュールを見て変更を伝える

- 火曜日と木曜日は、昼食後にスタッフと1対1で中庭に散歩に行く日課があり、本人は楽しみにしている。スタッフの都合で、昼食後に散歩に付き添うのが難しくなった。



スケジュールの変更の交渉する

- 火曜日と木曜日は、昼食後にスタッフと1対1で中庭に散歩に行く日課があり、本人は楽しみにしている。スタッフの都合で、昼食後に散歩に付き添うのが難しくなった。週末に時々行く売店であれば、対応可能ということで、日課の変更を交渉を試みた。

いつものスケジュール

変更ありのスケジュール
提示例

ばいてん

本人とスケジュールをいっしょに確認したうえで、散歩に×(中止)を貼り、「売店でリンゴジュースを買います」とカードを提示して説明、散歩のカードの上に貼る
→ 本人の反応を見ながら、理解できたか、受け入れられたかを見極める。
売店に行く際には、本人の意思や反応を見ながら、進める。

課題分析

～適切な行動を増やすために教え方の検討を行う～

- どんな複雑な行動も細かな行動・要素から成り立っているという前提のもとに、一連の行動をいくつかの行動・要素に分解すること。

例 手を洗う

- ①蛇口をひねって水を出す。
- ②石鹸をつけて泡立てる。
- ③手指をこすり合わせる。
- ④泡を水で流す
- ⑤水を止める
- ⑥タオルで手を拭く。

- 何気ない行動でも、複数の行程がある。
- つまづいているところに、環境調整や支援ツールを導入したりして、すこしずつ本人のスキルアップを図る。
- つまづきやすいところは不適切行動が起きやすいところでもある。支援のポイント、距離をとって対応するなど事前に考えることができる。

着替えの際に他害行為が出ることもあるケースを課題分析で考える

- 何も問題なく着替えるときもあるのに、「突然」怒り、そばにいる人に他害行為。シャツを着るときに多いという印象。
- 課題分析を行うと…ボタンホールが縦のときはスムーズだが、横のときにすぐにつまめないという立ってしまう様子。

対応→ボタンホールを縦のものに替える。

ボタンをつまみやすいものに付け替える。

余暇活動のときに、自立活動でつまむ練習が

できるようなものを取り入れる。

苦手な位置のボタンはスタッフが手伝う。

不適切行動につながらないように事前の対応をとることができる。
本人のスキル向上のために何を取り組むとよいのか分かる。

課題分析を使って、適切な行動の獲得を支援する

排泄（排便、排尿）、着替え、食事 などの日常の動作
コミュニケーション、余暇

『着替え』を教える例

	指導 スタート 時の様子	2週間後
① Tシャツを手取る。	○	○
② すそを持つ。	△	○
③ すそをひろげて頭を入れる。	×	△
④ 頭を通す。	△	△
⑤ すそを引っ張る。	○	○
⑥ 右手を通す。	○	○
⑦ 左手を通す。	○	○
⑧ すそを引っ張る。	○	○

- いずれも、課題分析を使うと、どこにつまみづいていて、どう支援するとできるかが分かる。

- すべての行程を一人でできるように取り組まなくても、一部を代行、援助しながら、一人でできる行程を少しずつ増やしていく。

まとめ

強度行動障害への対応のポイント

【配慮】

- ・ 分かりやすい指示（口頭指示が刺激になっていないか）
- ・ 見通しをしめす（スケジュールを示す）
- ・ 特性に配慮した学びやすい環境づくり（物理的構造化）

【スキル形成】

- ・ 機能的コミュニケーション（周囲が理解できる形で）
- ・ 余暇（ひとりでできること・相手とできること 複数）
- ・ 数分作業にとりくめる
- ・ 待つことができる